

第 41 回世界遺産委員会決議事項

WHC/17/41.COM/7B

30. 知床（日本）（N 1193）

世界遺産一覧表記載年：2005

評価基準：(ix)(x)

危機遺産一覧表記載年：該当なし

以前の委員会決定のウェブページ：<http://whc.unesco.org/en/list/1193/documents/>

国際援助：N/A

UNESCO 外部資金：該当なし

以前に実施されたモニタリングの現地調査：

2008 年 2 月：世界遺産センター／IUCN 合同リアクティブ・モニタリング・ミッション

以前の報告で特定されている資産に影響を与えている要因

- ・水関係インフラ施設（河川工作物、特に、大規模なサケ科魚類の遡上を含む魚類の移動を阻害または制限しているダム）；
- ・水産養殖（近隣締約国との連携・協力を含む、商業漁業の管理）；
- ・超高密度化した種（森林、より広い意味では植生の再生に影響を与えているシカの過剰な個体数密度）；
- ・観光／訪問／娯楽の影響、管理制度／管理計画（観光及び訪問者管理）；
- ・気候変動及び深刻な気象現象（気候変動によって見込まれる影響）；

説明資料のウェブページ：<http://whc.unesco.org/en/list/1193/>

現在の保全上の課題

2016 年 11 月 25 日、締約国は資産の保全状況に関する報告書を提出した。当該報告書は次の URL にて入手可能である <http://whc.unesco.org/en/list/1193/documents>。報告書は決議 39COM 7B.13（ボン、2015 年）に対応するものであり、トドの管理及び河川の流の中または流れを横断する人工構造物の撤去又は改善による魚類の生息環境の最適化のために現在行われている取組に焦点を当てたものとなっている。この報告は次の様に要約することができる：

- ・西部亜種（系群）のアジア集団に属しているトドは、季節的に資産及びその周辺に來遊している。商業漁業資源の捕食及び刺し網への被害に対する対応として、水産庁及び北海道の監督の下、過去のシーズンから得られたデータに基づいて「生物学的な採捕可能数」を計算することにより、北海道連合海区漁業調整委員会は「年間の採捕数の最高限度数（ACL）」を定めている。締約国は近年、資産を含む根室海峡への來遊群について独自の捕獲上限数を決定するようになってきている。日本の他の場所では ACL は大きく増加しているのに対し、根室來遊群についてはデータが限られていることから 15 頭に維持されている。根室來遊群についての現行 ACL は、今後の推定や調査の結果に応じて修正され

る見込みである。締約国は信頼できる数字を確立することは難しい課題であることを認識している。トドは商業漁業及び遊漁、観光活動や非致命的追い払い作業によるかく乱で行動を変えるため、従来の目視調査によるカウントは「不適」である；

- ・ルシヤ川を回復するための選択肢の更なる見直しについても報告されている。ルシヤ川は資産の中心部に位置し、サケ科魚類の遡上にとって極めて重要である。ルシヤ川を最終的に「できうる限り自然に近い形」に戻すという包括的目標の下、移動経路及び産卵環境を最適化するための更なるダムの改善について、ダム堤体の一部及び完全撤去を含め、現在シミュレーションや議論が行われている。こうした取組は保全と財産保護及び沿岸漁業との調和を試みるものである。代替措置についての更なる解析と試験結果を待ちつつ、ルシヤ川を横断する橋の撤去については現在議論中であり、将来の報告で詳細が説明される予定である。IUCN の諮問ミッション招聘に関する委員会の勧告は 2018 年に検討される予定である。

世界遺産センター及び IUCN の分析と結論

トドと商業漁業の競合に関する更なる分析は歓迎される。トドに関する締約国の懸念を十分に尊重する一方で、種全体としての IUCN レッドリストにおける位置づけは 2012 年に「EN」から「NT」に変更されたものの (<http://www.iucnredlist.org/details/8239/0>)、この資産に季節的に来遊する同亜種 (*Eumetopias jubatus* ssp. *jubatus*) の位置づけは「EN」である (<http://www.iucnredlist.org/details/17367725/0>)。レッドリストの情報は、1977 年から 2007 年にかけて同亜種の個体数が 69% も劇的に減少した理由がほとんどわかっていないままであることを強調している。こうした危機的な状況、大規模、最近かつ原因不明の個体群の大減少、並びに締約国による手法面及びデータ面の課題の認識にかんがみ、順応的かつ予防的なアプローチに対するコミットメントが歓迎される。IUCN レッドリストは「どのような水準であれ、トドの回復を制限するような意図的な捕殺が現在発生していることを示唆する証拠は無い」と述べているが、複数の国の領海にまたがって広く分散していることが知られている個体群の越冬個体を選択的に駆除することが、商業漁業という狭い観点からであったとしても、批判に耐えうる管理アプローチであるかは疑問の余地がある。トドの個体群動態及び商業漁業資源への複数の圧力の双方についての更なる分析と、刺し網の頑強化といった駆除に代わる措置への投資が推奨される。可能な限り、そうした取組は全ての生息国の間で調整されるべきである。更に、かく乱や追い払いに対するトドの行動変化の報告は、他の種への影響という点で疑問を生じさせる。

資産におけるたぐいまれなサケの遡上の制約を部分的または完全に取り除くことによって河川の水の流れの自然さを取り戻すことに関する更なる議論及び投資は歓迎される。サケの移動が、食物網及び陸域、淡水域及び海域の生態系の複雑な生態学的なつながりの主要な構成要素という点など、資産の OUV にとって極めて重要な要素であることを踏まえれば、委員会として締約国に本件に関する以前の複数の委員会決議を完全に実施するように要請す

ることが勧告される。最も新しい委員会決議（39 COM 7B.13）では、3つの砂防ダムの防災面における便益よりも資産の OUV に与える影響の方が大きいと思慮されており、特にルシャ川について、明確に認識されている資産の保全価値に対する永続的な制約を取り除くためにあらゆる努力が払われるべきであると考えられる。河川工作物の影響はサケの移動にとどまらず、様々な形で河川と沿岸の生態系に影響を及ぼすこと、また堆積物や倒流木の河川による運搬は重要な生態学的プロセスでもあること、その一方で、現地の資源利用者のためのアクセスや緊急時のアクセスを確保するための解決策も必要とされていることを思い起こす必要がある。IUCN/SSC とおそらく合同で実施する IUCN 諮問ミッションが、十分な情報に基づく意思決定プロセスに大きく貢献できる可能性がある。

最後に、2008 年のリアクティブ・モニタリング・ミッションが、特別敏感海域（PSSA）の設置検討と（多利用型海域管理計画を含む）管理計画の改訂などを勧告したほか、シカ、観光及び気候変動に関する課題についても特定したことを想起すべきである。世界遺産委員会が締約国に対してこれら 5 つの事項すべての最新状況を将来の保全状況報告に含めることを要請することが勧告される。

決議案：41 COM 7B.30

世界遺産委員会は、

1. 文書 WHC/17/41.COM/7B を検討した上で、
2. 第 36 回委員会会合（サンクトペテルブルク）及び第 39 回委員会会合（ボン、2015 年）で採択された決議 36 COM 7B.12 及び 39 COM 7B.13 を想起し、
3. 資産内に季節的に来遊するトドの絶滅危惧亜種の駆除について、締約国が順応的かつ予防的なアプローチにコミットしていることを評価して留意し、その上で締約国に対し、信頼できる年間採捕上限数の設定にはデータ及び手法面での多大な課題があることに照らし合わせ、同種の駆除を再考するよう勧奨する（urges）；
4. 締約国に対し、トドの個体群の保護を確保するために、漁業の管理について近隣の締約国と連携することを奨励する（encourages）；
5. サケの移動及び産卵の永続的な障害物を除去するための選択肢の更なる議論及び分析が現在進行中であることに留意し、また、ルシャ川の 3 つの砂防ダムの防災上の便益よりもそれらが資産の OUV に及ぼす影響の方が大きいことを想起し、締約国に対し、資産を可能な限り最も自然な状態に回復するための努力を継続及び強化するよう強く勧奨する（strongly urges）；
6. 本件についての更なる助言を提供するために、おそらくは IUCN/SSC のサケ科魚類専門家グループとの合同による、IUCN の諮問ミッションの招聘を検討することについての勧告を改めて表明する（Reiterates its recommendation）；
7. 締約国に対し、（多利用型海域管理計画を含む）改訂管理計画、シカ及び観光の管理、気候変動に関する考慮、特別敏感海域（PSSA）設置の有用性及び実現可能性に関する分

析について、最新の情報を将来の委員会に対する報告の中で提供するとともに、IUCN によるレビューのため、最新の管理計画の電子コピーを世界遺産センターに提出することを要請する (requests) ;

8. 更に締約国に対し、2019 年の第 43 回世界遺産委員会会合による検討のため、2018 年 12 月 1 日までに、資産の保全状況及び上記の実施状況についての最新の報告書を、世界遺産委員会に提出するよう要請する (requests)。

30. Shiretoko (Japan) (N 1193)

Year of inscription on the World Heritage List 2005

Criteria (ix)(x)

Year(s) of inscription on the List of World Heritage in Danger N/A

Previous Committee Decisions see page <http://whc.unesco.org/en/list/1193/documents/>

International Assistance

N/A

UNESCO Extra-budgetary Funds

N/A

Previous monitoring missions

February 2008: joint World Heritage Centre/ IUCN Reactive Monitoring mission

Factors affecting the property identified in previous reports

- Water infrastructure (River engineering, in particular dams, impeding or restricting fish migration, including major runs of salmonids);
- Aquaculture (Management of commercial fisheries, including coordination and cooperation with neighbouring State Parties);
- Hyper-abundant species (Excessive population density of Sika Deer affecting forest regeneration and vegetation more broadly);
- Impacts of tourism/visitor/recreation, Management system/Management plan (Tourism and visitor management);
- Climate change and severe weather events (Anticipated effects of climate change).

Illustrative material see page <http://whc.unesco.org/en/list/1193/>

Current conservation issues

On 25 November 2016, the State Party submitted a report on the state of conservation of the property, which is available at <http://whc.unesco.org/en/list/1193/documents>. The report responds to Decision **39 COM 7B.13** (Bonn, 2015) with a focus on the management of Steller's Sea Lion and ongoing efforts to optimize fish habitat by removing or adapting human-made structures in or across watercourses. The report can be summarized as follows:

- Individuals of Steller's Sea Lion belonging to the Asian group of the Western subspecies are seasonally present in and around the property. In response to predation on commercial fish stocks and damage to gillnets, the Hokkaido Fishing Zone Coordination Commission sets an "Annual Catch Limit" (ACL), under the supervision of the Fisheries Agency of Japan and the Hokkaido government, by calculating a "Potential Biological Removal" based on data from past seasons. The State Party has recently moved to determining a separate catch limit for the Nemuro Strait, which includes the property. Acknowledging limited data for the Nemuro Strait, the ACL was maintained at 15 individuals, whereas it was strongly increased elsewhere in Japan. The current ACL for the Nemuro Strait is to be revised according to the results of future estimates and studies. The State Party acknowledges serious challenges in terms of establishing reliable numbers. Conventional visual counts are "not appropriate", as visiting Steller's Sea Lion have changed their behaviour due to disturbance from commercial and sports fishing, tourism and non-lethal deterrence activities;
- Further review of options to restore the Rurua River is reported. The river is located centrally in the property and of extraordinary importance for salmon runs. Under the overarching goal to

eventually restore the river to “as natural a state as possible”, further dam modifications to optimize migratory passage and spawning habitat are under ongoing discussion and modelling, including partial and complete dam removal. The efforts attempt to balance conservation with asset protection and coastal fishing. Pending further analysis of and experimentation with alternatives, the removal of the bridge crossing the Rusha River is under ongoing discussion, to be detailed in future reporting. The Committee recommendation to invite an IUCN Advisory mission will be discussed in 2018.

Analysis and Conclusions of the World Heritage Centre and IUCN

The further analysis of the competition between Steller’s Sea Lion and commercial fisheries is welcomed. While fully appreciating the State Party’s concerns about Steller’s Sea Lion, it is noted that the current IUCN Red List status of the subspecies occurring seasonally in the property (*Eumetopias jubatus ssp. jubatus*) is “EN” (endangered, <http://www.iucnredlist.org/details/17367725/0>), whereas the status of the overall species was changed from “EN” to “NT” (near-threatened) in 2012 (<http://www.iucnredlist.org/details/8239/0>). The Red List information highlights that the drastic population collapse of the subspecies by 69% from 1977 to 2007 remains poorly understood. In light of the endangered status, the massive, recent and unexplained population collapse and the State Party’s acknowledgement of methodological and data challenges, the commitment to an adaptive and precautionary approach is welcomed. Even though the IUCN Red List entry notes that there is “no evidence to suggest that intentional killing of Sea Lions currently occurs at any level that could be limiting recovery”, it is questionable whether selective culling of wintering individuals of a population known for wide dispersal across the territorial waters of several countries can be a tenable management approach, even from the narrow perspective of commercial fisheries. Further analysis of both the population dynamics of Steller’s Sea Lion and the multiple pressures on commercial fish stocks and investment in alternatives to culling, such as reinforced gill nets, are recommended. As far as possible, such efforts should be coordinated among all range countries. Furthermore, the reported behavioural changes of Steller’s Sea Lion in response to disturbance and deterrence raises questions in terms of impacts on other species.

Further discussion of, and investment in, restoring the naturalness of watercourses by partially or fully removing constraints to the extraordinary salmon runs in the property are also welcomed. Given that salmon migration is a vital element of the property’s Outstanding Universal Value (OUV), including as a major component of food webs and a complex ecological link between terrestrial, freshwater and marine ecosystems, it is strongly recommended that the Committee request the State Party to fully implement previous Committee decisions in that regard. In line with the most recent Committee Decision (**39 COM 7B.13**) which considered that the benefits of the three check dams for disaster risk reduction are outweighed by their impacts on the OUV of the property, it is argued that, especially on the Rusha River, every effort should be made to remove persistent constraints to explicitly recognized conservation values in the property. It should be recalled that impacts of river engineering are not restricted to migrating salmon, but affect river and coastal ecosystems in many ways, and that river transportation of sediments and woody debris are important ecological processes, while solutions are needed to ensure access for local resource users and emergency access. An IUCN Advisory mission, possibly in conjunction with IUCN’s Species Survival Commission, could considerably contribute to an informed decision-making process.

Finally, it should be recalled that the 2008 Reactive Monitoring mission recommended, among others, the consideration of the establishment of a Particularly Sensitive Sea Area (PSSA) and the revision of the management plans (including the Multiple Use Marine Management Plan), and also identified challenges as regards Sika Deer, tourism and climate change. It is recommended that the Committee request the State Party to include an update of all five of these issues in its future state of conservation report.

Draft Decision: 41 COM 7B.30

The World Heritage Committee,

1. Having examined Document WHC/17/41.COM/7B,

2. Recalling Decisions **36 COM 7B.12** and **39 COM 7B.13**, adopted at its 36th (Saint-Petersburg) and 39th (Bonn, 2015) sessions respectively,
3. Notes with appreciation that the State Party is committed to an adaptive and precautionary approach to the culling of the endangered subspecies of Steller's Sea Lion occurring seasonally in the property, and urges the State Party to reconsider the culling of this species in light of significant data and methodological challenges in establishing reliable Annual Catch Limits;
4. Encourages the State Party to coordinate with neighbouring States Parties on the management of fisheries to ensure the protection of the Steller's Sea Lion population;
5. Notes that further discussion and analysis of options to remove persistent obstacles to salmon migration and spawning is ongoing and, recalling that the benefits of the three check dams on the Rusha River for disaster risk reduction are outweighed by their impacts on the Outstanding Universal Value (OUV) of the property, strongly urges the State Party to continue and strengthen its efforts to restore the property to the most natural state possible;
6. Reiterates its recommendation to the State Party to consider inviting an IUCN Advisory mission, possibly in conjunction with the IUCN Species Survival Commission's Salmonid Specialist Group, to provide further advice on this matter;
7. Requests the State Party to provide updated information on the revised management plans (including the Multiple Use Marine Management Plan), the management of Sika Deer, tourism, consideration of climate change and the analysis of the usefulness and feasibility of the establishment of a Particularly Sensitive Sea Area (PSSA) in its future report to the Committee, and to submit an electronic copy of the most recent Management Plans to the World Heritage Centre, for review by IUCN;
8. Also requests the State Party to submit to the World Heritage Centre, by **1 December 2018**, an updated report on the state of conservation of the property and the implementation of the above, for examination by the World Heritage Committee at its 43rd session in 2019.

31. Chitwan National Park (Nepal) (N 284)

Year of inscription on the World Heritage List 1984

Criteria (vii)(ix)(x)

Year(s) of inscription on the List of World Heritage in Danger N/A

Previous Committee Decisions see page <http://whc.unesco.org/en/list/284/documents/>

International Assistance

Requests approved: 2 (from 1988 to 1989)

Total amount approved: USD 80,000

For details, see page <http://whc.unesco.org/en/list/284/assistance/>

UNESCO Extra-budgetary Funds

N/A